

書評

神崎繁著

『内乱の政治哲学——忘却と制圧』

(講談社、2017年)

森川輝一

稀代の碩学の絶筆である。圧倒的な学識を駆使して既成の知を軽やかに覆してゆく思考の奔流に呑まれ、ほとんど溺れかけの体で評者は天を仰ぎ、嘆息する。著者の眼下には、一体どんな光景が広がっていたのだろうか。かつて著者は、「最高の山頂に立つ者は、すべての悲劇と悲劇的厳粛を笑う」という『ツアラトウストラ』の一節を引き、「重力」に逆らって「高みに立つ」賢者のみがなしうる、「笑いによる「悲劇」の超克」を語っていた（神崎『ニーチェ』、NHK出版、2002年、76-7頁）。他方、重力に抗えずに地を這って生きる者たちは、弱さゆえに国家の庇護を求める。世人にとって、国家の秩序を揺るがし、同胞を敵味方に引き裂く内乱は最悪の悲劇であり、いかに内乱を防いで国家の秩序を保全するかは、古代ギリシャ以来、政治（学）の最重要課題であった。しかし著者がそこに看破するのは、内乱を恐れるあまり、内乱という始原の忘却に国家の原理を求める「忘却の政治」である。その起源は、前403年のアテナイにおける「アムネステイー」に遡る。

前403年の「アムネステイー」とは、前年成立の寡頭支配（三十人僭主）を打倒した民主派が、前者に与した一般市民に対する懲罰や復讐を禁じた件を指す。前411年の内乱のあとを襲った報復の嵐が新たな内乱の火種となったことを反省しての措置であり、通例「大赦」と訳されるが、著者によれば、「悪の記憶の禁止」と解されねばならない（本書31頁）。この特異な解釈は（cf. 305-6頁）、1949年、連合国占領下のドイツにて、シュミットが匿名で発表した論考に依拠している。シュミット曰く、内乱を終息させ、報復の連鎖を断つ方法は、「相手方の完全な殲滅」か、敵対の記憶一切の「アムネステイー＝忘却」か、どちらかしかない。ゆえに、殲滅の暴力を避けるには、「正義と責任の追及」を断念し、共存のための「忘却」を選ぶほかない、というのである（11頁）。

「アムネステイー＝忘却」が必要とされるのは、国家の同胞を分断するばかりでなく、各々が正義を掲げて対立抗争を繰り広げる、という内乱の性質による。トゥキュディデスがケルキュラの内乱に、「暴勇」が「勇気」と呼ばれ、「沈着」は「卑怯」と嘲られる、といった「言葉の意味の転倒」を観察したように（『戦史』3巻82節）、内乱は価値の紊乱をもたらすのであり、その終息には力による制圧に加え、価値の相克の棚上げが必要となる（本書19頁）。『戦史』の英訳者でもあり、内乱を防ぐために契約による主権者の設立を説いたホップズが、革命の争乱に終止符を打つべくチャールズ二世が発した1660年の「忘却（＝Oblivion大赦）」を歓迎した所以であるが（82頁）、価値をめぐる相克を初期化して人々の同一性を確立し、正義に関する「中間的な妥協」を結んで法秩序を正統化する社会契約説の論理構成そのものに、「忘却の政治」が潜んでいる。「原初状態」において合理的個人に「無知のヴェール」を被せ、社会の基本原理への合意を調達しようとするロールズの正義論も、その例外ではない（54-7頁）。

記憶の忘却は、政治的な統合の条件なのか（たとえばルナンが、国民統合の条件として「過去の忘却」を強調したように）。しかし忘却とは、記憶の内に刻まれた生の時間の抹消であり、人間の生が時の中を進みゆく運動であるという事実の否定ではないか。シュミットやN・ローラーが着目するように、「静止」を意味するギリシャ語 stasis は、「内乱」の意味を併せもつ（16頁以下）。ならば国家 state とは、内乱を己が原理としつつ、その運動の静止を目指す、という矛盾を内包した秩序なのではないか。ちょうど一人の人間が、魂の内に葛藤を抱え込みながら正しい生き方を模索するように、ポリスもまた正義をめぐる抗争を経て、真の相合に達するものなのではないか——その道を探ったのが、「[ポリスと魂]のアナロジーによって「正義」を考えたプラトン」である（13頁）。

著者は、『メネクセノス』の叙述に、前403年の「悪の記憶の禁止」に対するプラトンの意図的な沈黙を読み取り、『国家』における理想国家の探究を、愛知者ソクラテスによる内乱の継続として読み解いてみせる。『国家』第2巻でグラウコ

ンが提示する契約説的な正義観は前403年の「悪の記憶の禁止」に相当しており、これを論駁して「真の正義」の探究を進め、民主制アテナイの通念を逐一覆しながら「理想国家を言論において建設」しようとするソクラテスは、内乱を抑すべく民主派が行った前403年の妥協に反旗を翻し、「ポリスの真の統合のための内乱」を遂行する「内乱扇動者」なのである(62頁)。国家の内乱を魂の葛藤との類比で捉えるプラトンは、魂の内「知性」が「気概」を味方につけ、「欲望」を制御して全体の調和を果たすように、国家もまた内乱という分裂と葛藤を経て、正しく調和した状態に達する、という理路を探るわけだが、その道は半ばで途絶えてしまう。第9巻の国制転換論では、民主制における価値の紊乱——トゥキュディデスのいう「言葉の意味の転倒」——が、僭主制という最悪の政体をもたらす病理として批判され(74頁)、晩年の『法律』にいたると、ソクラテスの姿は消え、代わって「節度ある僭主と優秀な立法家」により、「万人が万人に対して」敵であるという「自然」に見合った現実的な国制の建設が語られる(64、76頁)。この延長線上に立ち現われるのが、万人の戦争という自然状態を制圧するホッブズの強大な主権者であるが、それはもはや「物体の集合体」でしかない(90頁)。「忘却の政治」は魂の葛藤の制圧、あるいは、魂そのものの忘却にいたる、ということなのだろうか。

著者は『魂への態度』(岩波、2008年)等で、西洋哲学における魂の捉え方を、プラトンやアリストテレスに典型的な「葛藤型」と、犬儒派からストア派に受け継がれた「振動型」とに分けている。前者によれば、魂は各部分に分裂して共時的に葛藤しつつ、調和を目指す。『国家』の内乱イメージがこれに当たるが、先に見たとおり、一なる調和を志向する以上、所詮内乱とは克服されるべき分裂でしかない。これに対し、一元的な魂が時間の中を進みゆく過程で振動する、という後者の見方に従えば、内乱とは魂の振動の所産であり、魂が生きて運動を続けるかぎり、私たちの生から切り離すことができない。ストア派の物体論に通じていたホッブズはこれに気づきながら、内乱への「恐怖心」ゆえに、魂の運動を力で制圧する道を

選んだ(79-80頁)。また、本書第二部によれば、『存在と時間』への途上で「振動型」の系譜から多くの知見を摂取したハイデガーも、なぜストア派を黙殺するにいたる。翻って、「キニコスの・ストア的世界観を身近に見据えていた」のが、「ニーチェとフーコー」である(153頁)。ホッブズが恐れた魂の振動は、ニーチェにとっては「生成の運動に身を任せる「子供の遊戯」であり、それを眺める「賢者」に無上の至福を与える(『ニーチェ』、79-80頁)。フーコーもまた、ハイデガーの真理理解に影響を受けつつ、後者が忌避したストアの系譜を辿ってキニコスの賢者に立ち戻り、彼らの「パレーシア」の実践に、真に自由な「真理のゲーム」を見る。それは「慣習や制度の恣意性を暴露」するとともに、「狂気」や「獣性」という限界を見つめることで、人間の「尊厳を確認する一つの精神の運動である」(神崎『フーコー』、NHK出版、2006年、113、118頁)。「忘却の政治」の動因である内乱への「恐怖」を克服するとき、トゥキュディデスがケルキュラの内乱に見た「言葉の意味の転倒」という事態は、制圧すべき混乱ではなく、様々に真理を語る悦ばしき実践に、価値の転換と創造の遊戯に転じる、ということなのか。

だが、キニコスの生は、「内乱の政治哲学」への十全な解答たり得るのか。世界に住まう者を名乗って国家への帰属など笑い飛ばし、「世界という樽への「引きこもり」を敢行」するディオゲネスの生き様は確かに気高く、美しい(『ニーチェ』、114-5頁)。しかしそれは、人間が単独では自足し得ず、ゆえに国家を生きる者たらざるを得ない、という政治(学)の根本命題の閑却、いわば政治の忘却を意味するのではないか。全体主義の時代に国家を問いつけたアーレントやシュトラウスという、著者には魅力に欠けるらしい(本書268、272頁)政治思想家に親しんできた評者が欲して止まないのは、著者の政治哲学である。たとえば、第一部の結びの表題にある「想起の共同体」とは、何か(95頁)。著者は、そこにいかなる政治の可能性を見据え、どんな光景を遠望していたのか——天を仰ぎ、賢者の不在に嘆息するほかない。